

《京都》御所と離宮の栞

(おり)



其の七

— 京都御所 —

清涼殿 荒海障子 

あらうみのしょうじ

障子と言えば、現在では淡く光を通す明り障子のことを指しますが、もともとは衝立や襖などの総称でした。京都御所では襖の形式で障子と呼ばれるものは、紫宸殿の賢聖障子と清涼殿の荒海障子があります。

けんじょうのしょうじ

あらうみのしょうじ

この荒海障子は、清涼殿東の弘廂の北端にあり、その絵は土佐光清が安政2年(1855)内裏御造営の際に麻布張りの上に、墨絵で画いたものです。平安時代からあった伝統的な障子で、図柄は中国の『山海経』に記された伝説の国の光景

とさみつぎよ

せんがいきょう

であり、手や足の長い人間が画かれています。清少納言の『枕草子』の一節には「清涼殿の丑寅の隅の、北のへだてなる御障子は、荒海のかた、生きたる物どものおそろしげなる、手長足長などをぞかきたる。上の御局の戸を押し開けたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふ」と記されています。

うしとら

画面右上には、花山院家厚の書による色紙が貼られています。



荒海障子



現在清涼殿にある荒海障子は、昭和41年に模写をしたもので、原品(上記写真)は収蔵庫に収めてあります。

 マークは、御所・離宮の外側から、いつでもご覧になれます。

 マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、[参観要領 - 京都御所 \(kunaicho.go.jp\)](http://kunaicho.go.jp)をご覧ください。

 マークは、春と秋には申込みが必要のない一般公開の際にご覧になれます。下記にて日程等をご確認ください。 [参観要領 - 京都御所 \(kunaicho.go.jp\)](http://kunaicho.go.jp)

 マークは、通常公開していない場所にあります。

京都御所の障壁画と絵師



ぎょうにんけんとちず
狩野永岳が画いた御常御殿上段の間「堯任賢図治図」



岸岱が画いた諸大夫の間「虎」

現在の京都御所は安政2年(1855)11月に完成したもので、前年4月の焼失後2年とかからない急ピッチの再建でした。このとき焼失を免れた障壁画があり、またその後御殿の新造や取壊しが若干ありま

すが、現在ある障壁画を数えると、襖が864面、戸襖が336面、小襖が106面、張付(壁に直接、障壁画を貼り付けたもの)が231面、杉戸が218面と、御殿に常時設置される屏風48面や衝立14面で、合計すると1817面となります(ただし原品保存のため模写したものを除く)。

画題では、御学問所・御常御殿の上中下段の間など、表向きの格式の高い部屋では中国的な勸戒画・吉祥画が画かれるという傾向がありますが、そのほか、日本的な名所絵・四季絵などの景物画も広範に画かれています。

安政の御造営に関わった絵師は100名近くおり、土佐派・狩野派などの伝統的に御所の絵を画いてきた御用絵師の流派に限らず、多様な絵師が採用されていて、これらの障壁画は当時の京都画壇のタイムカプセルとも言われています。

現存の障壁画の総面積を試みに計算してみると、約3300㎡あり、その中で面積が広い絵師は、まず狩野永岳が約186㎡

です。永岳は小御所・御学問所・御常御殿の各上段の間(天皇の御座がある)の襖絵を担当しており、その位置付けがうかがわれます。そのほか、土佐光文が約155㎡、土佐光清が約148㎡、原在照^{がんたい}が約136㎡、岸岱が約130㎡、…という順になりました。6人制バレーボールのコート1面(9m×18m)が約162㎡となっているので、永岳はそれ以上の大きさを画いたことになります。



円山応挙が寛政内裏造営の際に画いた小襖「水に鮎」
皇后宮常御殿御小座敷上の間 (現在収蔵庫に保管)

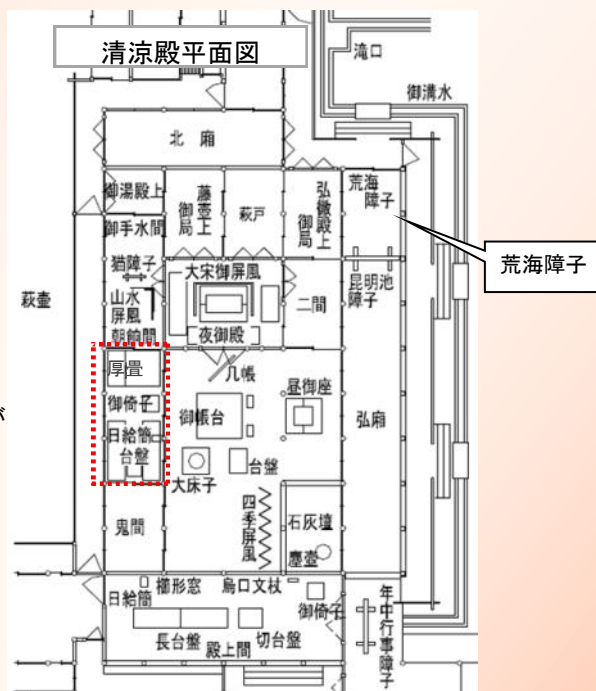
だいばんどころ ごいし
清涼殿 台盤所の御椅子



写真中央に御椅子，左手に厚置，右手前に見えるのは台盤

肘掛けと背を備えた四脚の腰掛けで，材は黒柿です。肘掛けは2段で，その上方は勾欄型になっています。全体を螺鈿の唐草文様で飾り，座は縹緗縁の小畳を敷いて茵を重ねてあります。茵の縁は赤地に雲形の模様です。

大きさは幅55cm，奥行き54cm，高さ91cmで，座面の茵は幅46cm，奥行き39cmです。写真では大きさが分かりにくいと思いますが，現代のオフィスにある椅子と座面の大きさはさほど変わらないようです。



が
台盤所

この御椅子は以下のとおり展示されます。

江戸東京博物館 開館20周年記念特別展
「大江戸と洛中 ～アジアのなかの都市景観～」
平成26年3月18日(火)～5月11日(日)
江戸東京博物館1階展示室
(東京都墨田区横網1-4-1)

だいばんどころ

清涼殿西廂にある台盤所は，平安鎌倉時代には女官が詰め，天皇の御膳を整えたところです。

順徳天皇が鎌倉時代に著された有職故実の解

きんぴしょう

説書『禁秘抄』には，台盤所について「三間。北ノ

あさがれい かた

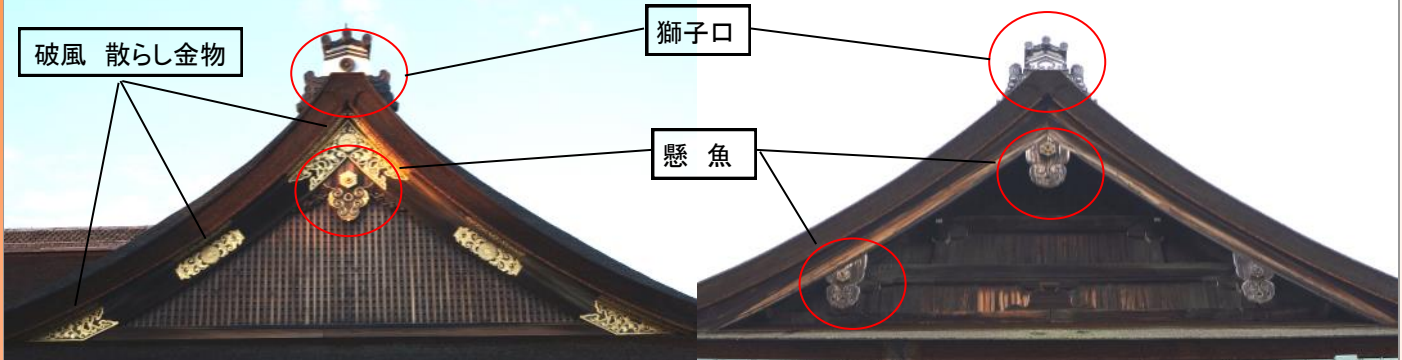
間ノ朝餉ノ方ニ黄端ノ畳ヲ敷ク。東ニ椅子」と書かれてあり，御椅子を東側に置くことが記されています。



僅かな光でも輝く螺鈿の唐草文

御殿の屋根を飾る装飾類

観 殿



京都御所の御殿は様々な装飾が施されていますが、今回は屋根周りに注目してみます。

まず懸魚は屋根の破風に取り付けた妻飾りです。魚を懸けると書くように、火除けの意味があると言われているものです。京都御所の懸魚は、紫宸殿・清涼殿などには猪の目を模したと言われる猪の目懸魚が使用されています。かぶら懸魚は音が鳴る矢の鏑矢から由来していると言われるもので、新御車寄・諸大夫の間などで使用されています。御常御殿・小御所・御学問所などは三花懸魚で、三方にデザインが配置されたものです。



猪の目懸魚(紫宸殿)



かぶら懸魚(新御車寄)



三花懸魚(御学問所)

獅子口(下記写真)は棟の端に置く瓦で、棟瓦と共に桧皮葺きや柿葺きなどの屋根の重しとして使われてきました。紫宸殿・清涼殿・春興殿などは①の一般的なもので、それ以外の御殿では②のように中央に菊の御紋が入ったものが使われています。その他、散らし金物と言って、破風には菊の御紋などを使った金物の装飾があります。



散らし金物

屋根を飾るこれらの意匠については、紫宸殿・清涼殿などの平安様式を復元して建てられた御殿には、菊の御紋の意匠やそれを使った金色の金物が使われていないという特徴が見られます。

— 仙 洞 御 所 —

ゆうしんてい そとこしかけ
又新亭の外腰掛



ゆうしんてい
仙洞御所の北池の西に又新亭という茶屋があります。この茶屋は茅葺きの四間水屋付きで、簡素な竹の中門や外腰掛を配しています。

元々ここには修学院離宮から移築した
ししさい
止々斎という茶室がありましたが、嘉永の大火（1854）で焼失しました。明治になってからその跡地に京都御所の北にあった近衛家の茶室を移築したものがこの又新亭です。

又新亭から茅葺きの中門を経て少し離れたところにあるのが外腰掛で、屋根は片庇の柿葺きの建物です。北池の船着き場から苑路を隔てた先にあり、飛び石伝いに外腰掛に導かれます。向かって左の袖壁は半吹き抜け、右には竹格子の下地窓があり、雪隠が2つ裏側に備えられています。

腰掛けは幅約3メートルで、その内50センチは竹を簀の子状にし、斜めにカットされています。足元には踏石が置かれ、大人が4人ほど座ることができます。

外腰掛は又新亭と同様極めて簡素な造りとなっており、茶室（又新亭）の準備が整うまでの待合として、侘びの世界への導入口となっています。



外腰掛から眺める風景



腰掛けと踏み石



竹格子の下地窓

— 桂 離 宮 —

土 橋



桂離宮には大小あわせて6基の土橋があります(池にかかる反りの大きい橋は3基)。土橋とは土を乗せてある橋のことで、木材で組んだ橋の上に土を乗せ、桂離宮では左右に苔を張って美しく仕上げています。

使われる木はクリ材でシバグリ(柴栗)といい、小粒の実を付ける山野に自生している原種です。

クリ材は耐久性が高く、水湿にも強い材として幅広く利用され、その性質から建物の土台や鉄道の枕木にも使われてきました。

土橋で使われるクリ材の表面は、ナグリという技術で削り出されています。ナグリは主にクリ材で使用されてきた技術で、ちやうな手斧という道具で荒削りし、凸凹があるように仕上げる表面加工です。

土橋表面の玉砂利の下は赤土で、クリ材の橋桁との間には漆喰た た きと杉皮が使われています。漆喰は三和土(土と石灰とにがりを合わせ、叩いて仕上げたもの)で厚さ3センチを三層に重ねて仕上げます。一層で9センチに打つと割れた時には、一気に下まで割れてしまうことがあるので、三層に分けて割れに対応します。更に漆喰の下は杉皮を敷きますが、これは結露した水分の調湿に使われ、これらは上部から伝わる水を木材まで通さない役割を果たしています。

土橋の左右の苔の部分は、杉苔を使用し、その土台は赤土です。赤土の粘土質を利用して橋の両側部分を整形します。粘度が重要で、適度な柔らかさがないとひび割れがおこり、そこから水が回り苔の部分が崩れてしまいます。



ナグリ加工された橋桁



京都御所御内庭の土橋

桂離宮の土橋は京都御所の土橋のような手摺りがありませんが、反りが大きいので歩きやすいように階段木があります。

— 修 学 院 離 宮 —

中離宮客殿一の間の霞棚



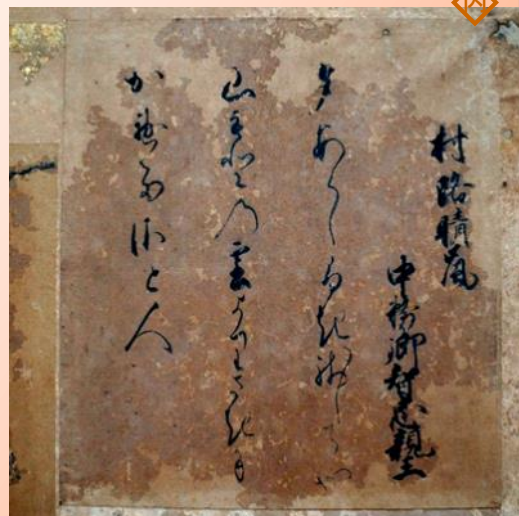
修学院離宮中離宮の客殿一の間北側に

は、天下の三棚の一つに数えられる霞棚があります(他の棚は桂離宮の桂棚(葉其の一にて紹介)、三宝院の醍醐棚)。5枚の棚板が、霞がたなびいているかのように配置されています。棚の幅は、約290センチで、中央の一番長い棚板が144cm、その右上の一番短いものが75cm、板厚はそれぞれ2.5cmで、^{けやき} 欅の板を使用しています。

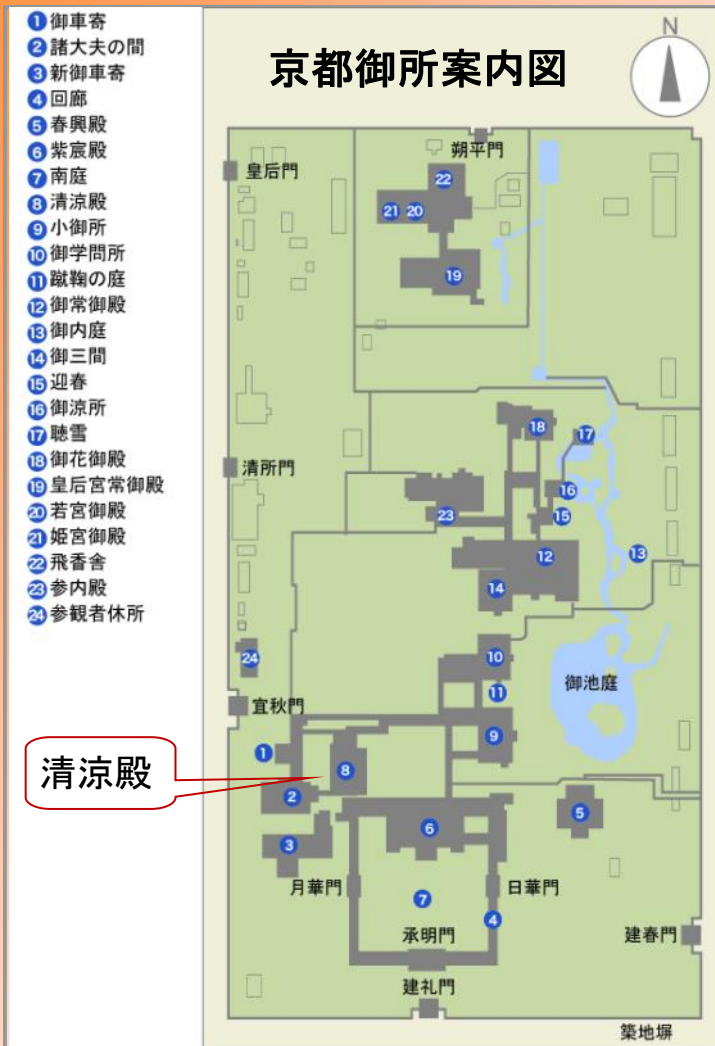
棚の壁面には、金砂子を雲形に散らしたところに、色紙が貼られていて、「修学院八景」を題材に和歌と漢詩が1編ずつ詠まれています。和歌は公家の歌人などに、漢詩は五山の長老に詠ませたものです。

下記色紙は修学院八景の題材のひとつ「村路晴嵐」を桂離宮中書院などを増築された八条宮家二代智忠親王が詠んだものです。

なお現在霞棚を飾る色紙も含む障壁画は昭和47年に模写したもので、原品は別に保存しています。



村路晴嵐 中務卿智忠親王 夕あらし吹残してや山もとの雲よりさきに帰る里人 (京都事務所保存のものを撮影)



修学院離宮案内図



これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、
宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>

〒602-8611 京都市上京区京都御苑 3

其の七：平成26年2月7日発行

宮内庁京都事務所 代表電話：075-211-1211

参観係直通電話：075-211-1215